

部下の困った!10篇

やりたい仕事が貰えて、初めて仕事が好きになり、やり甲斐が生まれる。一流になれば、格好の良い仕事で、毎日楽しく働ける——若い人はそう考えがちですが、それはまったくの誤解です。

どのような一流のプロフェッショナルも、仕事の九割は地味で単調な作業の連続です。「神は細部に宿る」といいますが、その神をつかまえるには、目に見えない単調な作業の積み重ねが必要。それがあって初めて、目に見える成果が生まれるのです。

そして、こうした地味な作業に取り組み姿勢こそが、やりたい仕事を呼び込むための鍵。私の経験では、地味な仕事を「面白い」「やり甲斐がある」と思って取り組んでいると、逆にやりたい仕事が、ごく自然に集まってくるのです。

私はこれを「仕事の逆説」と呼んでいます。「それは科学的に実証されているのか」などと疑問を持つのは、若さの落とし穴。人生には、論理を超えた世界がある。無条件に覚悟を決めることも、ビジネスの世界では大切です。まず、「この仕事は面白い」と思ってみてください。実は、一流のビジネスパーソンは、退屈に思える仕事を「やり甲斐のある仕事」にする心得を身につけています。

それは次の「三つの心得」です。

# やりたい仕事を引き寄せる人生の法則とは

田坂広志 ●多摩大学大学院教授

Hiroshi Tasaka



**PROFILE** 1951年生まれ。81年、東京大学大学院修了。工学博士（原子力工学）。同年民間企業入社。90年、日本総合研究所設立に参画。取締役。2000年、現職及びシンクタンク・ソフィアバンク設立。11年3~9月、内閣官房参事。

## 仕事に面白み、やり甲斐を感じるための「3つの心得」

- |  |   |   |
|--|---|---|
| <p><b>1 仕事を「研究」する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●ホチキスの打ち方一つ、接待一つにも技がある</li> <li>●どんな仕事にも研究の余地あり。面白い! → 深く考える力、広く見つめる力、先を読む力、人の心を感じ取る力がつく</li> </ul> | <p><b>2 仕事の「意味」を考える</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●仕事の目的ではなく「自分にとっての意味」を考える</li> <li>●「なぜ今、この地味な仕事を与えられたのか」「何を学ぶ機会なのか」「何を学べようか」 → 「解釈力」ある人は必ず前向きに解釈する</li> </ul> | <p><b>3 仕事の「彼方」を見つめる</b></p> <p><b>最重要!</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●「何をやるか」より「何のためか=企み」</li> <li>●学びに真摯に取り組む → 自然に腕が、人間が磨かれる</li> <li>→ 仕事、人間、機会、運氣が集まってくる</li> </ul> |
|--|---|---|

※田坂広志氏の話をもとに編集部作成

第一は、仕事を「研究」すること。例えばホチキス一つでも、どう打てば資料が読みやすく扱いやすいかを考える。そうした探究心を持つていけば、どんな些細な仕事でも興味を湧いてきます。そして、探究心を持って仕事に取り組んでいると、自然に、深く考える力、広く見つめる力、先を読む力、人の心を読む力、場の空気を感じ取る力が養われ、そうした力は、将来、重要な仕事に取り組みるとき、必ず役に立ちます。

第二は、仕事の「意味」を考えると。仕事の目的だけでなく、意味を考える。なぜいま、この仕事自分が与えられたのか、この

仕事は、何を学べということなのか、その意味を深く考えるのです。その能力を、私は「解釈力」と呼んでいます。そして、人生は、この「解釈力」によって道が分かれる。起こった出来事を、前向きに解釈できるか否かの勝負です。

### こんな修羅場は減多に体験できない

私が、ある企業の部長を務めていたとき、二人の部下が「あの国際プロジェクトが吹っ飛びます」と顔色を変えて部長室に駆け込んできました。二人とも優秀な部下です。事態の深刻さは推して知るべし。私に事態を打開する妙案などあるはずありません。しかし私は、その場で一呼吸置いた後、「おめでとー」と言いました。

「こんな修羅場を体験する機会は減多にない。君たちが、この修羅場で学べることを徹底的に学んでくれたら、それでよい。まだ勝負は終わっていない。最後の最後まで、打てる手を打ち尽くそう」

激烈な逆風のトラブル対策です。わくわくする場面ではない。しかし、こういうときに成長できる。ビジネスには、そう腹を括る覚悟が必要なきもあつたのです。

第三は、仕事の「彼方」を見つめること。仕事の目的は、会社の

利益だけではない。社会への貢献がある。その貢献の意味を深く考えることです。

大切な寓話があります。真夏に教会の建設現場で働く二人の石切り職人。一人は「稼ぎのために、炎天下、いまましい石と悪戦苦闘している」と暗い顔で語る。もう一人は「人々の心の安らぎの場となる素晴らしい教会を造っている」と明るい顔で語る。

前者は目の前の仕事を、後者はその彼方を見つめています。そして、我々が働き甲斐を感じるのには、仕事の彼方に思いを馳せるとき。ときおり、仕事の手を休め、その仕事の彼方を見つめ、職場の仲間と語り合うべきでしょう。この仕事はこういう素晴らしい社会貢献の事業の一部なのだ、と。そのとき、働き甲斐とは、与えられるものではなく、仲間と創り出すものであることに気がつくでしょう。

人生において、無駄なこととは何一つありません。すべてが学びの機会であり、それらに真摯に向き合っていくと、自然に、腕が磨かれ、人間が磨かれていきます。

自分の仕事を、どこまでも前向きに見つめること。その姿勢は、よき仕事、よき人間、よき機会を引き寄せ、さらには、よき運氣さえも呼び込んでいくのです。

高橋盛男 構成

## 「仕事の逆説」を理解せよ。人生に無駄は一つもない

部下  
6  
subordinate